

如来は生きておはしますか

甲「先生、私は苦しくてたまりません。お話を聞いてみると。胸が暗くなつてきて、昨夜も眠られませんか。どうすればいいのでしょうか。」

乙「あなたは何歳になりますか。そして何年み法を聞きますか。」

甲「三十歳になります。十年ばかり聞いています。」

乙「あなたは、何ゆえに暗くなるか。苦しまねばならぬか知っていますか。」

甲「わかりません。ご講演を聞いていると、胸に一つの暗い塊ができて、それがだんだん太つてきます。」

乙「私がつけたのでも、外から加えられたのでもありません。あなた自身の病が現われてきたのです。」

甲「……………」

乙「あなたに問います。如来はましますか。」

甲「いられると思います。」

乙「重ねて問います。仏はいられますか。……………三度、四度、重ねて問います。如来はいられますか。」

甲「……………」

乙「それなら、この文を聞いてください。」

『汝は、仏教徒なりと言ふ』

あえて問う。仏はまことにましますか

なんじはつねに仏に仕えると言ふ

あえて問う。仏はまことに生きてましますか。

なんじはつねにみ法を説く。

あえて問う。まことに仏はありと言ひ得るか。

ああ。仏ましますに、かかる生活ありや

仏生きてましますに、かかる生活あり得るや。』

もう一度読みます。

……………

これが何と響きますか。」

甲「まあ……………」

乙「どうしましたか。あなたの過去の歩みが、仏ありと言ひ得ますか。」

甲「私はまったく如来を殺していません。私は、今、如来というものの実在する意味と、私の生活が如来を殺し盲にしていたことが、はっきりいたしました。」

乙「盲にしても殺しても、如来は盲でもなく、殺されもしません。ただその人の生活が死んでいるのです。しかも死んだ日暮しであることすら明瞭にしてはいません。自身がはっきりしない所に、どうして如来がはっきりしましょう。」

甲「私の過去はまったく如来を殺していません、今それがはっきりわかります。私は、如来を盲にしていたことすら知らずに、欲望中心の動きであったのです。」

乙「それはよいことに気がつきました。それでは、まことにあなたの過去はゼロです、棒引きであることがわかりましたか。」

甲「私の三十年の生涯はまったく無価値なものでありました。いくら聞いてもわからず、暗くなつてゆくはずです。暗くなつてゆくのは、私の貪欲生活の破綻が来たのです。」

乙「それで今、あなたは、如来をさらに求めますか。」

甲「いいえ、求めなくても如来は生ききつていられます。すべてが破れてしまった私の上に、その智慧、慈悲のすべてが、はたらききつていられます。」

乙「そうですね。そのあなたの合掌の手に、その念仏のところに、求道の中に、如来の願心は生ききつています。あなたは今、あなた自身に、はつきり会つたはずです。如来の真実をまともに見なければならぬあなたは、一切を清算せしめられたはずです。」

甲「私は今こそ、愚禿と言われた聖人のみ心がわかります。私の心の中には、我慢と欲とが横たわっています。それしかないのです。」

乙「それでは不安がありますか。胸に暗い塊でもありますか。」

甲「いいえ少しも。」

乙「あなたは、過去三十年が反古であつたように言いました。しかしはたしてゼロであつたでしょうか。過去の三十年にも、如来は生きていたのです。如来の聖なるおんはからいには、微塵の齟齬も狂いもなかつたのです。そしてあなたは、今、過去の歩みの一切を通して、はじめて如来に会うことができたのです。」

甲「ああそうですか、私の過去はゼロではなかつたのですか！」

乙「自力に死して他力に生きる、その現在の一念に更生したものは、死んでいたその長き過去のすべてが生かされたのです。聖人は、『眩劫多生のあいだにも、出離の業縁知らざりき、本師源空いまさずば、このたびむなしくすぎなまし』と、眩劫無始の我を発見し、師に会うた喜びを讃嘆していられます。さらにまた『久遠劫よりこの世まで、あわれみましますしるしには、仏智不思議につけしめて、善悪淨穢もなかりけり。』久遠劫の大悲を感銘していられます。それをまた『遠く宿縁を慶べ』とも述べられました。久遠の我を発見したものは、また同時に久遠の大悲を発見します。如来の智慧光によるのであります。」

甲「ありがとうございます。私は今、力強い生き甲斐を感じます。そして今まで聞いてきたことがすべて生きてきました。」

乙「私どもが、知人のない汽車の中に一人いようと、便所の中に入った時だろうと、二六時中、如来と一体なる信心の中に、その摂取を思うがゆえに、行住坐臥の生活をおろそかにすることができないのです。絶対に尊重せざるを得ないのです。その平素の生活は、無自覚、無信仰、無懺無愧の中に、如来を盲目にしていつつ、一席の法座によつて、功利的な極楽を求めたり、安心や信心や喜びや不動の生活を求むるがごときは、まちがいのまた甚だしいと言わなければならぬ。」

甲「私がつまつくそれだったので。『仏は生きてましますか』にはつまつくまいってしまいました。」

乙「如来は信心を通して生活とともにあるのです。いかなる苦悩の中にも無碍道が開かれ、人生のほんとうの相の中に、生きる喜びを得るのであります。限りなく求道しつづ、如来の願の心を生きさせていただきましょう。」